

思い出の写真の撮影プロセスが意味するものについての考察

Discussion on the meanings of a memorial photo-taking process

永田映子*¹
Eiko Nagata

*¹ 介護老人保健施設マカベシルバートピア
Geriatric Health Services Facility MAKABE-SILVER-TOPIA

The use of digital compact cameras is increasingly common in various therapeutic scenes such as reminiscence therapy as they are gaining more and more public popularity. The author has been providing photo-related activities to elderly individuals through different approaches including collage therapy, photo therapy and Coimagination Method. Among my clients, a female client often brings old photos and takes pictures of them to use for therapy. The number of pictures she takes of each photo varies. This paper discusses her photo-taking process based on the author's realization that one picture, among many she takes of each photo brought for a session, may reflect her inner psychology.

1. はじめに

コンパクトデジタルカメラの普及に伴い写真は回想法などで利用される機会が増えてきた。筆者はこれまでコラージュ療法や回想法、写真療法、共想法に取り組み、高齢者との写真活動を実施してきた。筆者の経験では新しい写真を使う利用者が多く、家族写真などを再び撮り直して使う例はあまりなかったが、Aさんは自ら古い写真を持参して撮影し直すことが多くみられた。

Aさんは80代前半の女性で認知機能は正常である。数年前鬱病を患ったAさんは、リハビリのために入所後庭仕事などの作業の中で少しずつ回復することができた。Aさんの症状は敬愛する兄の死、手塩にかけた孫の自立などによって引き起こされ、4年後にはほぼ回復している。Aさんの撮影する枚数は少ないが特徴としては撮り直しの写真が多く、その中で姉の写真はぼんやりとした画像のまま撮り直しが行われなかった。他の参加者がピントの合わない写真をそのまま使った例はあまりなく、大抵は失敗写真として廃棄された。筆者は姉の写真が長い間気になっていたが、その後しばらくたってから持参した男の孫の写真の時にもピンぼけ写真が選ばれた。

男の孫は数年前発症したAさんの気分障害の直接の原因であり、その写真を見ながらそれまでも繰り返し語られた孫の言葉と自分の切ない思いを強い口調で述べた。またピントが合っていないことを気にはしていたが、撮り直しをすることはせず最終的には使わなかった。姉に関しては多くを語らずぼんやりしていても構わないと述べた。以上の理由からAさんの被写体への気持ちと、撮り直しをせずピンぼけ写真を使ったことには何らかの関係があるのではないかと考え調べることにした。

2. 方法

(1) 最初にAさんの撮り直し写真の枚数が他の参加者と比較してどの程度多いかを調べた。比較した6名は自主的に撮影しており他者の手を借りた写真は少ない。Aさんが参加した22回に同席した者の撮影枚数の平均を調べ、各自の新しい写真ではない撮り直し写真の平均枚数を出した(Table 1, Figure 1)。(2) 表(Table 2)の中で#1から#8までは同じ年度内に撮影された。#1以下の写真の被写体は家族や知人などの人物写真あるが、自分を含む家族写真が10枚、自分の入った友人との写真が1枚で総数11枚の写真を撮影した時間順に整理した。表情が分からないもの2枚(×印)を含む11枚の写真について

仕上げるに至るまでの撮影枚数をまとめた。男の孫の写真は乳児期の横顔であるため、表情ははっきりしない。

(3) Aさんが撮影した写真のうち、ピントのあっていないものを最終的な画像として選んだ2枚の写真(#1, #8)について何を語ったかを調べ(3・2)、次に詠まれた短歌を列記した(3・3)。

3. 結果

3.1 撮り直し写真の枚数の比較

(1) 参加者の平均撮影枚数を比較すると、さんは6.1枚で参加者の平均23.1枚の26%である(Table 1, Figure 1)。反面撮り直し写真の平均枚数は1.6枚で撮影した写真の26%に及び、唯一撮り直しをしたCさんの平均0.5枚の3倍以上で特に多い($P < 0.01$)。

Table 1

参加者名	平均枚数	撮り直し平均	比率(%)
A	6.1	1.6	26
B	41.2	0	0
C	31.9	0.5	1.6
D	28	0	0
E	16.2	0	0
F	16.8	0	0
G	21.5	0	0
全体	23.1	0.3	1.3

(注) 平均枚数: 実施22回の撮影画像の平均枚数
撮り直し平均: 撮り直し写真の平均枚数
比率: 撮影した写真のうちの撮り直し写真の%

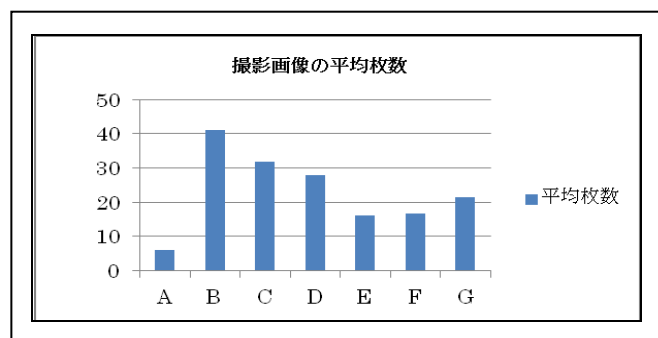


Figure 1

連絡先: 永田映子, 介護老人保健施設マカベシルバートピア,
0296-54-2800, 300-4415 茨城県桜川市真壁町東山田1945

(2)次にAさんの撮り直し写真のピントの合い具合や撮影回数を表(Table 2)にまとめた(表情の分からないものを×).

Table 2 各被写体の撮影枚数

番号	被写体	ピント	回数
#1	姉	×	1
#2	親族	○	1
#3	夫	○	4
#4	本人(1)	○	5
#5	本人(2)	○	1
#6	友人	○	1
#7	兄	○	2
#8	男の孫	×	2
#9	女の孫(1)	○	2
#10	女の孫(2)	○	1
#11	女の孫(3)	○	1



(a)前月の写真(#0)



(b)姉(#1)



(c)男の孫(#8)

Figure 2

3.2 写真のピントの合い具合とAさんの思い

(1)Figure 2の(b)姉(#1)は特にぼんやりした画像となっている。Aさんは自分でよく撮れない時は援助者に撮り直しを依頼するのが常であった。撮り直しの必要性を尋ねると「思い出だからそのままでよい。」という返事であった。「姉は美人だったけれどなかなか芯が強く、何度も体にメスをいれながら最後まで病と闘った。自分の体を大切にせず5度目の手術を受けて亡くなった。」という内容の発言があった。Aさんの姉は生涯独身であったが母親の晩年に一時実家に戻って看病をし、その間にAさんとの間に溝が生じて疎遠になった時期があったという。

(2)#2~#7は本人の映像5枚以下複数枚が撮影されAさんが満足するまで撮り直しが実施されている。中には1枚だけのものもあるが仕上がりはぼやけていない。今は亡き夫の4枚の写真も援助者に最後の撮影を依頼し、その他をみてもぼやけたものは見当たらない。

(3)最終的に使われなかった(c)男の孫の写真(#8)は合計で2枚撮影されていた。Aさんが使ったものは最初に撮影されたほうのピンぼけ写真であった。またこの写真をみながらかつてAさんの胸にささった男の孫の言葉の数々を繰り返して述べていた。男の孫の表情は分からないが、同じ日に撮影した女の孫の写真(#9~#11)は全て正面を向いており笑顔であった。

3.3 各写真のテーマ(短歌を中心として)

次にそれぞれの回想的な写真のテーマを挙げるが、Aさんは亡き家族に対しては「喪の作業」ではないかと思われる短歌を添えている。これは他の参加者にはない特徴的な点である。

#1 姉

亡き母のもとに逝きませ妹の 今宵紅葉葉くるくると散る
姉の作った最後の短歌として

研修の学徒よ五度メスうけし吾が体を凝視して学び給いな

#3 夫

沢がにをとって遊びし君ヶ浜 思いはとおく君は逝きにけり

#4 本人

加齢の重み漸く知りて 晩年の母の思いしのぶわが日々

#7 兄

再びを帰れぬひととならん 護身用に二匹のわんちゃん追走させます

#8 男の孫:写真を見ながら語った言葉

孫なんて可愛がるものではない 可愛がって損をした

#9~#11 女の孫

ばあちゃんおはようマンマどうぞ 汝ある故に生はたのしも

4. 考察

今回の事例ではAさんの思いが込められた短歌や写真についての説明と、撮影された写真のピントの合い具合や撮影回数との関係に注目した。表(Table 2)のうち#1と#8のピントが合っていないが、姉の写真の前月に撮影された写真(a)前月の写真(#0)はくっきりと写っており、習熟度が写真のピンぼけの原因ではないと考えられる。姉と男の孫の写真に限定すれば、本人の言葉とピンぼけ写真との関連がみられたことから、被写体との心理的な距離が写真のぼけ具合に影響を与えている可能性が示された。しかしその関連の説明は今後の課題である。

次にAさんの撮影枚数は6.1枚と全体平均の約26%で目立って少ない(Table 1)。その後もAさんの撮影枚数は少ない時点で2枚程度であり、日によっては全く撮影せず仲間の写真をもらうこともあることから、何らかの不調があるかもしれない。筆者の個人的な経験ではあるが、2年間ほとんど写真を撮らなかつた時期を考えると困難な事情を抱えていたことがあげられる。また一般的な傾向として体調の悪い利用者は撮影回数が減る現象がみられる。

またAさんの新しい写真が少なく、家族写真の撮り直し作業と回想とが同時に行われていることから、撮り直し写真の多さと過去に意識が向いていることとの関連性が疑われるが、その説明も同じく今後の課題である。

5. まとめ

今回の事例では調査対象の写真枚数も少なく、Aさんの回復過程のすべてが含まれているわけではないため確実なことは言えないが、今後新しい写真や撮影枚数が増えるかどうかを引き続き観察していきたい。Aさんの写真活動はこれからも継続されるため、撮り直し写真には特に配慮しながらその活動を支援していきたい。

中井(2009)によれば、過去は反復再現されるが全くの再現ではないため、自分の都合のよいようにあるいは自己を美化するように変造・加工され、置き換えや象徴化されるのが普通であるという。また中井は「記憶は日々私たちのストーリーを紡ぐ能力によって絶えず変化する。(中略)この加工する能力は本来的に健康な生命のいとなみである。」と述べている。

回想法はロバート・バトラーによって提唱され、高齢者の鬱や不安神経症にも効果があるとされる。抑鬱的な感情障害からの回復を目指し、写真活動や短歌、回想によって生涯を振り返り多きものにせんとするAさん努力は今後も継続されるであろう。

参考文献

- 【中井09】中井久夫: 兆候・記憶・外傷, みず書房(2009)
- 【永田11】永田映子: 写真が引き出す高齢者の生きる力と表現力, 人工知能学会第25回全国大会論文集(2011)
- 【大武12】大武美保子: 介護に役立つ共想法, 中央法規出版(2012)